

平成27年3月17日(火)

老球の細道128号

愚直一途

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

かつてプリンストン大学のヘッドコーチを務めた伝説のコーチ、ピート・キャリルは自分のコーチング哲学をまとめた本を書いている。数年前日本でも訳されて出版された。題名は『賢者は強者に優る』。早速購入して読んでみたがウイットに富んだ言葉が満載。

「勝つためには多大なエネルギーが必要となり、負けるのに必要なことは何もない」

「敗北は、物事を写す鏡となる」

プリンストン大学というのは、アメリカではあまりにも学業のレベルが高く、運動能力に秀でたバスケットボール選手の確保が困難をきたしている。そのような厳しい環境の中、入学してきた選手をトレーニングし、独特のシステム「プリンストンオフェンス」を考案してノースキャロライナ大学などの強豪校に互角以上に對抗している。選手をリクルートできない多くのチームの理想的なモデルである。

この本の中には、才能はないが、努力と賢さで勝ち取った栄光のエピソードがたくさん掲載されている。その中でも印象に残った内容は、愚直に自分の道をとことん追求する学生の姿である。その中の一節を紹介する。

【かつて、ケビン・ミュリンズという選手がいた。高校時代、レベルの低いリーグでプレーしていた上に、すこし貧弱に見え、どこかでテニスをしていそうなタイプだった。しかし、卒業する頃は、NBAの4順目で指名を受けるまでの選手に成長した。

ミュリンズが2年生の時に、8年前に卒業したアシスタントコーチと1:1のゲームをした。アシスタントコーチの方が7対6、7対3、7対0の3連勝を収めた。ミュリンズは疲れ果てて、立ち上がるのにも助けがいるほどだった。その後、アシスタントコーチに負けた自分に嫌気がさし、体力をつける決意をした。しばらくすると、ミュリンズが授業、体育館、その他、どこに行くにも、キャンパス中を走り回っているということを耳にするようになった。憑りつかれたように走っている。次のシーズンが来ても彼はまだ走り回っていた。そして、この年のNCAAトーナメントで、サンディエゴ大学戦で39得点、ネバダラスベガス戦で23得点を記録し、誰も彼を止めることができなかった】

ちなみに、「愚直」という意味は、新明解国語辞典によると「バカ正直」とある。最近バカになれる奴が少なくなったと言われる。みんな賢そうなふりをしている。本当にバカになれるのは本当に賢い奴だけである。

バスケットボールに限らず、世の中で偉大な仕事をなしえた偉大な人物は愚直に、一途に物事に取り組む人々がほとんどである。周りから笑われようが、馬鹿にされようが、自分の信じたことをバカ正直にとことんやり通す。その結果、できなかったことができるようになり、普通のレベルから偉大なレベルまで向上する。

またピート・キャリルはこの本の中で断言する。「プリンストン大学の本当のスーパーstarは、図書館にいる。彼らは、夜通し勉強できるように書架の隙間に寝袋を隠しているのだ」。愚直な英雄は勉学の世界の方がたくさんいるらしい。私たちバスケットボールマンも負けてはいけない。こだわりを持ってとことん努力する姿勢を。それほど能力を持ち合わせない普通の人間が傑出するには、愚直一途以外道はないような気がする。